

異界の騎士ペルレスヴォー

植 田 裕 志

13世紀の散文聖杯物語『聖杯の至高の書』（通称『ペルレスヴォー』ニッツェ版で全10192行¹⁾）は、いかにもクレチヤンの『聖杯の物語』の続編らしく、聖杯探索の冒険の旅の物語として始まりながら、やがて主人公ペルレスヴォーが聖杯城を奪還し、アルテュール王がその聖杯城への旅を終えると、2つの主題に沿った語りが同時に進行していく。一方ではペルレスヴォーによる異教徒制圧のための冒険の旅の物語、他方ではアルテュール王の宮廷での内紛と王国への外敵の侵入の物語というように。

その違いは語りのスタイルにも現れる。典型的な冒険の旅の語りではたとえば、「ゴーヴェンはすごい勢いで進みながら、神の助けを得てその騎士を見つけられますようにと祈る。どんどん馬を進めるとやがて陽が落ちるころ、森の中のある隠者の庵にやってくる」（4181-4184行）というように、ある地点から次の地点に至るまで、どちらの方角へ、どれほどの距離あるいはどれほどの時間を進んだのか、曖昧である。その上、語り手はある騎士の冒険の旅の途中で、別なところで冒険の旅を続けている別の騎士の話に移ってゆくから、読者はいつのまにか自分が冒険の世界のどこにいるのかわからなくなってしまふ。

これに対して物語の後半以降には、アルテュール王の宮廷を中心にして、「彼（クゥ）は小ブリタニア（ブルターニュ）へ来ると、アルテュール王を恐れてシノンなる城に籠城した」（7821-7823行）とか、「ランスロは宮廷を出発し、40名の騎士を引き連れ、すでにマダグラン王が到着していたアルバニアの地へやってきた」（7993-7995行）というように、歴史叙述のようなスタイルで語られる。アルテュール王はカルドゥエイユにあってずっと動かないので、語られていることのだいたいの位置関係を読者はイメージすることができる。

『ペルレスヴォー』ではこのように、聖杯を中心とした冒険の物語とアルテュール王の宮廷を中心とした歴史物語とが途中から並行して語られていく。しかもこの作品の終わりで、聖杯の騎士ペルレスヴォーの方は迎えに来た船に乗って西の海へ去り、聖杯城はやがて廃墟と化すというのに、アルテュール王の宮廷の方では、紆余曲折を経た後もなおブリアンとクラウドス王という外敵との決着がつかないままに話が終わってしまう。

同じ聖杯をめぐる同じ散文物語としてよく比較される『散文の探索』²⁾とはこの点でも対照的である。『散文ランスロ』三部作中の第2編である『散文の探索』は、聖杯の探索の開始から主人公ガラアドによる探索の成就そしてガラアドの死までの冒険物語であって、つぎの第3編『アル

テュールの死』がアルテュール王国の危機から最期までの歴史物語となっている。こちらでは冒険物語と歴史物語は別々の作品になっており、しかもそれぞれの作品が主題に見合った終わり方をしている。したがって、『ペルレスヴォー』の作者は話をうまくまとめることができなかつたと評されることにもなるのだが³、実は作者はこの終わりがたで満足していたのではないかと考えられる。『ペルレスヴォー』にキリストの受難とそして最後の審判という物語を読み取ろうとしたケリーがそうである。ケリーによれば、アルテュール王の治世という俗世の時間の流れのなかに、キリストの受難と再来という聖なる時間を組み込んだということになる⁴。ケリーが『ペルレスヴォー』に読み取る図式の細部についてはともかく、大筋においてはケリーの指摘は正しいものと思われる。

ここでは、物語りの世界、空間的広がりという点から、『ペルレスヴォー』の持つこの冒険物語と歴史物語の二重性を明らかにしたいと思う。そこで鍵となるのがいわゆる「異界」という概念である。ここで「異界」というのは、ハワード・ロリン・パッチの言う“the other world”のことである。パッチは著書 *The Other World* (黒瀬他訳『異界』)⁵で、オリエントからギリシア、ケルト、ゲルマン神話などにみられる、別の世界(典型的なものは死者の世界)の描写とその描写に出てくるさまざまモチーフ(川とか、泉のある園とか)とが中世文学にどのように伝えられているかを示しているが、日本語で「異界」、「他界」、「彼岸」、「冥界」あるいは「別世界」と言い、またフランス語でも“l'autre monde”あるいは“l'au-delà”というように、一連の用語、概念の区別は曖昧である。ここでは日常の世界ないし空間に対して、これとは異なる世界ないし空間という広い意味で「異界」(the other world, l'autre monde)の語を使うことにする⁶。したがってキリスト教徒にとっての死者の世界も、ケルト伝説的な別世界も含めれば、そうした「もう一つの世界」に限らず、「もう一つの世界」の描写に見られる特徴が見られる空間(「異空間」というべきか)も、異界として扱うことにする。

パッチは『異界』の中で、折にふれて何度か、『ペルレスヴォー』にみられる異界のモチーフを指摘しているが、ここでは、まず典型的な異界ないし異空間として、聖オーギュスタン聖堂のある土地、漁夫王の城、黒隠者の城、ペルレスヴォーの船旅の海をとりあげる。

最初の、聖オーギュスタン聖堂、これは、物語の冒頭、無気力症(volentez delaiantz, 69行)におちいていたアルテュール王が、王妃グニエーヴルの勧めに従って、気力を取り戻すべく訪れるところである。

グニエーヴルは言う。「<白い森>にあって、冒険(aventure)によらなければ見つけることのできないかの聖オーギュスタン礼拝堂へあなたがいらっしゃれば、お帰りになった時には善きことをなされる気力をお持ちになられることと思います」と。ここで「冒険」(aventure)というのは、一般に聖杯探索の物語でそうであるように、神の意図によって騎士たちのもとを訪れる不思議な出来事というほどの意味である。翌朝、王は一人でカルドエイユを出発すると、とある

「冒険に満ちた森」(une forest aventureuse)に入り、その夜、ある礼拝堂つきの館で、一人の隠者の魂をめぐって天使と悪魔が口論する場面に遭遇する。翌朝また馬を進めると、だれも見たことがないような美しい平地(lande)を目にする。その入り口には回転戸があって、そばには乙女が座っている。乙女の話では、その平地にこそ聖オーギュスタン礼拝堂があるのだが、「その平地と周囲の森はとても危険なので中に入った人間は出てくるときには死んでいるか重傷をおっているかどちらかである」とのこと。王がその回転戸から中に入るとすぐにめざす礼拝堂がある。王は外から礼拝堂の中のミサ(幼児イエスの姿は十字架上のイエスの姿にかわる)を目にし、そこの隠者の説教を聞いたのち礼拝堂を後にする。すると黒づくめの騎士が現れて王に戦いをいどむ。王は黒騎士を倒すものの自らも負傷する。回転戸まで戻ってくると先ほどの乙女が、死んだ黒騎士の首をもって来るように、そうしなければ王の傷は治らないと言う。言われた通りその首をとってきて王は回転戸を通して乙女に首を渡す。そこを発って、しばらく馬を走らせると、天からの声が、近いうちにふたたび宮廷の集いを催すことを王に命ずる。そこから王はまたひとしきり馬を走らせてカルドエイユへ戻る。

ここでアルテュール王はいわば二重、三重の異界の中へと進んでいる。まず「冒険に満ちた森」に入り、次に「回転戸」という境界を通して「平地」へ入り、そしてついに聖オーギュスタン聖堂の中へ、というように。とりわけ、2番目の「平地」という異界は、見た目の美しさ、しかしそこから無事に戻ってくることができないという危険、回転戸という境界、境界のところにいる番人ないし案内人とも言える「乙女」、そして異様な黒づくめの騎士と、異界のモチーフに満ちている。また全体として、異界から戻り得たことによって不思議な効能が得られる、この場合はアルテュールの無気力が治る、これもまた異界の旅への重要なモチーフである。

ところで話の順序は逆になるが、実は王が出発する前夜、宮廷の若者のカユが夢を見て、そのために死ぬという不思議なエピソードが語られている。

聖オーギュスタン聖堂参りに同行するよう王に命じられたカユは、その夜、宮廷の広間で眠りにつく。夢の中で、王が先に行ったと思ひこみ、馬を走らせると、森の平地の中に礼拝堂が見えてくる。中には一人の騎士が横たわっている。カユは思わずそこにあった金の燭台をとると、礼拝堂を後にして、王を探してまた平地を出て、森に入る。するとそこに黒くて醜い男がいて、金の燭台を盗んだことをとがめ、カユの右脇腹をナイフで刺す。そこでカユは目をさますが、夢の中のはずのナイフは刺さったままでカユは死んでしまう。

同じ礼拝堂へ行く話といっても、カユの場合は夢の中のことで、アルテュールの方は現実の旅である。しかし、実はアルテュールに襲い掛かってきた黒騎士は、カユが金の燭台を奪った騎士の兄弟であり、カユの盗みをとがめるべく主君のアルテュールに襲いかかってきたことも含めて考えるならば、夢と異界への旅とがまったく同じ構図に従っていることがわかる。カユは黒く醜い男から受けた刺し傷のために、目がさめてから、つまり夢から覚醒への境界を越えたところで命を落とした。アルテュールは黒騎士から受けた負傷のため、そのまま回転戸という境界を越え

てしまえば死んでしまっていたが、乙女の言葉に従って倒した騎士の血によって傷は治り、境界を越えてもどってきても無事であったというように。

異界とは、たとえば「今、わたしは、ここにある」というような意識の裏返しにあるものと言える。「ここ」と対極的にある「あそこ」、「この世界」と対極的にある「あの世界」が典型的な異界世界である。そして「今」に対して「死後」というのが典型的な異界の時間である。ところで、「ここ」といえる広がりの内側に「ここではない」場所がいわば穴を開けているというような、そういった「異界空間」も考えられる。この聖オーギュスタン聖堂のある平地のように。そして、「今」という時間の中に「今でない」時間が穴を開けている、それが夢ということが出来る（さらに言えば夢の中の私は現実の私ではない）。

もちろん、中世の作者がこのような言葉で考えたとは思えないが（そもそも当時のフランス語で“l'autre monde”という言葉もなかった）、なんらかの形で作者は異界と夢の図式の共通性を意識していたのではないかと思われる。

『ペルレスヴォー』冒頭のこのアルテュール王による聖オーギュスタン聖堂参りのエピソードは、作者がとりわけ意を凝らして書いたものと思われる。それは、『ペルレスヴォー』が筋の上ではクレチヤンの『聖杯の物語』のように見せかけながらその設定を変えていることをはじめに読者に知らせるためであり（たとえば主人公の生地がカマアロあること）、またこの物語を読み解くための鍵を示しておくことでもある（名前をめぐる問題）。そしてまた、何よりも、冒険の物語が再開されるために必要であった。というのも、本作品の設定からすれば主人公の失敗によって、漁夫王とともに、アルテュール王までも病にかかってしまったがために、本来ならば王が宮廷の集いを開きそこで不思議な出来事がおこる、なぞの人物が訪れるということで始まる冒険の物語がこのままでは始まらない、始めることが出来ないからである。そこで、王みずからが宮廷を発って、異界への旅をおこない、幼児キリストが受難のイエスに変化するという聖なる神秘を目にすることによって、王を病から回復させることが必要だったのである。

作品のはじめからおよそ4分の3のところまで、漁夫王の城（漁夫王の死後は聖杯城とよばれる）をめぐる旅が、物語の主な筋となっており、この漁夫王の城、漁夫王の領地こそ冒険する騎士にとっての異界の最たるものである。

ゴーヴァンとランスロはいずれも漁夫王の城をさがす旅を続けているところで物語に登場し、それぞれついに城にたどりつくものの聖杯に関する問いを発することはできずにアルテュール王の宮廷へ戻ることになる。そして<死の城の王> (Roi du Château Mortel) によって漁夫王が殺された後に、ペルレスヴォーが城へ向かい、戦いに勝利して奪還する。そこで、神がアルテュール王に聖杯城をたずねるようにという命を下し、王はゴーヴァンとランスロを連れて出発、ランスロは途中で抜けるものの、ゴーヴァンと共に聖杯城でペルレスヴォーに会った後に帰ってくる。やがて、ペルレスヴォーは聖杯城を出て、一連の異教徒征服の冒険を経た後に聖杯城へ戻っ

てくる。そして最後に迎えの船が聖杯城へやってきて彼を乗せて出てゆくところで物語は終わり、その後聖杯城が廃墟と化したといういわば後日談が簡単に述べられている。

漁夫王の城への旅と言っても、どこにあるのか、どの道をゆけばいいのわからぬまま、ただ神の導きにまかせて馬を進めているうちにやがてたどり着くというような旅、典型的な騎士の冒険の旅である。

たとえばゴーヴァンの場合、聖杯とは関係のない出来事にいくつも遭遇し、やがてある隠者の住まいでアリマテヤのヨセフの血筋の優れた騎士が病の床に臥せっていると聞か、それが「寡婦の息子」(le fils de la Veuve Dame) かどうかわからぬまま、

彼はすっかりおどろいたままそこを立つと、森に入る。しかし物語は彼の過した日々のすべてを語ることはせず、簡潔に言うには、彼はさまざまな土地と王国を経て長い旅を続けると、とても美しく豊かで満ち足りた土地と見つけ、その真ん中に美しく豊かな城を見つけた(1687-1690行)

と続く。高い城壁に囲まれた美しい城があり、城門には鎖でつながれたライオンが中央で見張り、両側に一人ずつ固い銅でできた野人が弩で矢を放っている(1690-1696行)。この時点では、それまでさまざまな冒険を経てきているゴーヴァンにも、そしてゴーヴァンにつきあってきた読者にもこれが漁夫王の城であるかどうかわからない。実際、出てきた僧の話ではそこは漁夫王の領地の入り口でしかなくて、領地へは聖ヨハネの剣を持ってこなければ入ることはできないと言われる。そこからゴーヴァンは聖ヨハネの剣を求めてアルパニのギェルガラン王のところまで行く一連の冒険を経た後にもどってくる(2139行)。するとこの城の野人はもはや矢を放つことなく、前にいたライオンはおらず、ゴーヴァンは喜んで迎えられ、次の<審問の城>を経て、ついに漁夫王の城を目にすることになる。

これがランスロの場合には、ペルレスヴォーと出会った後、隠者ペレスの庵を出発して(3432行)、いくつかの冒険を重ねた後、まず広い川に浮かぶ船を見つける(3632行)。船には釣りをしている1人を含めて数人の老騎士と2人の乙女が乗っている。その夜の宿をとるべきところをたずねると、山の向こうに、その川が周囲を流れる美しく豊かな城があり、それは漁夫王のものであると教えられる。ランスロは次にある隠者に会い、グニエーヴルへの恋を捨てるようにという忠告を断ると、隠者のもとを出る。そして前を見ると漁夫王の城が見えたとなる。

ランスロの場合には漁夫王の領地の入り口、境界というものがまったくでてこない。そのかわり、「川に船を浮かべて釣りをする者」という、クレチヤンの物語にあった光景がここに出てくる。

ペルレスヴォーが聖杯城の奪還にやってくるときはあっさりとしている。漁夫王の死後、ペルレスヴォーが聖杯城の奪還に向かわなければいけないことは、生地カマアロの危機を救った彼の

ところへ来た<車の乙女> (Damoiselle du Char) の話で読者にもわかる。ただし実際にいよいよ聖杯城へ行くとわかるのは、ペルレスヴォーがその後いくつかの冒険を経て、伯父ペレスの庵を訪ねた時になってのことである。伯父からも聖杯城奪還を要請されたペルレスヴォーは「そこを立つと、伯父の勧めにしたがって腕帛をつける。彼のあとを白驃馬がついてくる。彼はかつての漁夫王の領地のほうへ行くと一人の隠者に出会う。」隠者はその森にまだ逃げずに残っていたほかの12人の隠者を引き合わせる。彼らはペルレスヴォーと共に戦うつもりである言う。するとときには「彼は城に近づく、そこの入り口の防備は嚴重である」とやがて戦いが始まる。

ペルレスヴォーの場合には漁夫王の領地への境界のようなものはない。漁夫王なきあとこの地の神秘性が失われたのか、あるいはそこへ入ってゆくのが漁夫王なきあとの城の正当な継承者ペルレスヴォーであるからだろうか。また、前のゴーヴァンとランスロの場合にも、まずはペレスの庵を通過してから漁夫王の城へたどりついている。ただし、ペレスの庵から漁夫王の領地まで、ゴーヴァンの場合には、語りの中で「さまざまな土地と王国を経て長い旅を続け」た後であり、ランスロの場合にはいくつかの冒険を経ているが、ペルレスヴォーの場合にはいかにもすぐ近くに漁夫王の城があったかのような印象を受ける。漁夫王とペレスとはペルレスヴォーにとっては同じ母方の伯父であり、しかもともに優れた人物であったということで、順番としてペレスの庵を通過してから漁夫王の城へと行くことに意味があったと思われる。

アルテュール王がゴーヴァンと共にやってくる時も、城への接近はあっさりとしている。天からの声に命じられて聖杯城をめざして出発したはずのアルテュール王一行ではあるが(6394行)、読者にすればいつ城が現れるかと思うほど冒険が続くうち、ついに二つ目の騎馬試合の後(そこで王妃グニエヴルの死の知らせが届き、ランスロがカルドエユへ戻る)、「彼らはどんどん馬を進めて、かつての漁夫王の城へやってきた」となる(7178行)。ここでも漁夫王の領地、城までの境界のようなものはない。またペレスはこの時死んでしまっているため、ペレスの庵を通過することもない。そこで次に漁夫王の城(聖杯城)とそのあたりの描写を比較すると、次のようになる。

1) ゴーヴァンによる漁夫王の城の訪問(2280-2489行)

城はある谷が開けたところにある。前には礼拝堂。城の入り口に3重の水の流れがあり、3つの橋がある(針の橋、氷のようにもろい橋、大理石の支柱のある橋)。城門に十字架上のイエスとマリア、ヨハネの絵が描かれており、地面では1頭の恐ろしいライオンが見張っている。

2) ランスロによる漁夫王の城の訪問(3698-3758行)

城の前には複数の大きくて幅の広い橋(「それらはゴーヴァンに見えたようなものと同じようには見えなかった」)。城門には十字架上のイエスの絵、2頭のライオン。

3) ペルレスヴォーによる聖杯城奪還の戦い (6113行-6271行)

城の前の礼拝堂(謎の枢が開き中にアリマテアのヨセフの遺骸)、城の前には新たに備えられた9つの橋、城門の入り口には白いライオンと赤いライオン。

4) アルテュール王とゴーヴァンによる聖杯城訪問 (7179-7288行)

「彼ら(王とゴーヴァン)はかつて漁夫王のものであった城へやって来るとそれが、読者のみなさんがこれまで何度も記されているのをお聞きになったように、贅沢をつくした美しいものであることがわかる。」城の後ろを川が流れていて、その川の源は「地上の楽園」(Paradis Terrestre)にあり、あらゆる宝がそこから城へ流れてきていた。城には「エデン」(Edem)、「喜び」(Joie)、「靈魂」(Ames)の3つの名があった(「靈魂というのは、そこで死んだ人間の靈魂はいずれも楽園に行ったからである」)。

5) ペルレスヴォーが聖杯城から去る (8712-10118行)

海の方からラッパの音が鳴り響き、赤い十字の船がペルレスヴォーを迎えにくる。船は礼拝堂の広間の下に碇をおろす(“aengree desoz la sale”, 10151行)。

城とその周囲の描写はいずれもそれほど詳しいものではなく、そこに見られるモチーフも橋や川やライオンというように異界描写としてはありふれたものである。ただ、アルテュール王が訪れたところで、「地上の楽園」から流れてくる川、「エデン」という名、あらゆる宝が流れ込むところというように、この聖杯城そのものが「楽園」であるかのような印象を与える。

異界としての漁夫王の城の興味深いところは、その様子そのものよりも、その様子によって変わることである。そのことは、ランスロによる訪問のところで、語り手みずから入り口の様子がその前のゴーヴァンの時と違っていることを認めている。いつのまにか城の周りを川が流れているかと思えば、最後には海岸であることになっている。漁夫王の城は、訪れる人間によって、城へ到る経路も違えば、城の様子も違う。漁夫王の領地はいったいどこにあるのか。聖杯城の奪還に向かう途中のペルレスヴォーに出会ったある隠者が、数人の隠者以外は、みなログル王国に逃げようとしていると言っていることから(6104行)、ログル王国の外にあるのはわかる。しかし、そのどこか、その時々場所をかえるのか、あるいはまぼろしのごときものであるのかと思わせる。

ところで作者は騎士にとってはある場所の光景が次に訪れた時には変わってしまっている場合があることを、架空の原著者ヨセフスを介して次のように認めている。それはアルテュール一行が聖杯城への旅の途上でチンタジェル(Tintagel)を訪れた後のことである。

翌朝、彼らはミサを聴くとそこを發った。ゴーヴァンとランスロは、それらの森を知っていると思っていたが、土地のようすがあまりにも様変わりし、変化していたので (si muee e si diverse)、自分たちがどこに入りこんだか分からなかった。ヨセフスが我々に証言するところによると、島々の様子 (les samblanches des isles)⁷ は神の意によって到来するさまざまな冒険のために変化するものであったが、それらが様々な姿で (diverses) 現れるのでなければ、冒険の探索はそれほど騎士の気に入るものではなかった、というのもどこかの森なり島なりに入りこんでなにかの冒険を見出した後に、またそこへ戻ってきてその館や城や冒険がまたべつの様子をしていると分かれば、自分たちの苦痛と苦勞が彼らにとってはつまらぬものではなく、また地上に新しい教えがしっかりと根づくことを神が望まれたということであったから。(6612-6622 行)

ここで土地の様子が変化することについて言っているのは、どこか特定の場所についてというわけではない。となれば究極の冒険の地である漁夫王の城の様子が訪れるたびごとに変わるのは当然ともいえる。ここで、「様々な」と訳した“divers”という形容詞、「その時々姿を変える」という意味で、あるいは「変幻自在」あるいは「多様な」と訳すべきか、実はある乙女がベルレスヴォーを讃えて言う言葉の中にも出てくる。「あの方はこの世でもっとも姿を変えられる騎士 (“li plus divers chevalier”) であり、もっともすぐれた騎士なのです」というように。(4466-4465 行)

これはベルレスヴォーを探すゴーヴァンの冒険の途中、ベルレスヴォーが何度も武具をかえてゴーヴァンの前に姿を現したこと (そのためゴーヴァンは何度も会っておきながらそれに気づかなかつた) をさしている。しかし、実は物語が始まってから主人公ベルレスヴォーが姿を現すまで (2927 行)、読者はしばらく待たされるのであるが、その間に、他の登場人物たちの話の中で、あるいは「漁夫王の城へ最初に行った者」であるとか、またあるいは「寡婦の息子」であるとか、さらにまた「最もすぐれた騎士」というように、それぞれが実は一人のベルレスヴォーについてさまざまな言い方をしている。さらには、クレチヤンの作品では「ベルスヴァル」という名であったものが、この物語では「ベルレスヴォー」に変わっているのだが、ペレスの庵で病の床にあったときには「パル・リュイ・フェ」(Par-lui-fet) という名前になっている⁸。多様なアイデンティティ、多様な名前を持つものは特別な存在であり、それが主人公ベルレスヴォーと漁夫王の城については、だからこそ崇高なものであるということになる。

漁夫王の城が楽園ともいえる異界であるとするならば、これと対照的に地獄あるいは地獄への入り口ともいべきところが黒隠者 (Noir Ermite) の城である⁹。

それは物語のはじめの方、<車の乙女>の一行がゴーヴァンと共に、そこを訪れるところで出現する (747 行)。この<車の乙女>の一行、3人の乙女たちというのは不気味な一団で、一人

がある王の首を、また別の一人がある王妃の首をさげ、さらに3頭の白鹿が曳く車には150の騎士の首が積んである。一行がゴーヴァンと共に城へ近づく前にあるのがかつて誰も目にしたことがないほど恐ろしく醜い森である。木という木が焼けたかのように真っ黒で、枝には葉が1枚もない。地面も焼けたかのように黒く、草はなく、ここかしこに割れ目がある。やがて大きな谷の入り口に城が見えてくる。城の周囲はやはり醜い城壁が囲み、近くの醜く黒い山の頂から、雷鳴のようなおぞましい音をたてて川が流れ込んでいる。入り口の城門の醜さはまるで地獄であるかのよう。というように、「醜い」という意味の“laide”、“hideux”という形容詞がしきりに出てくる。

城の中からはくすぐれた騎士<le Bon Chevalier>の到来を待ちわびる多くの者たちの嘆き声が聞こえる。<車の乙女>はあらかじめゴーヴァンに、これから城の者たちがすることに手出しをしないよう、ゴーヴァンには彼らに逆らう力はないのだからと忠告する。はたして城から152人の黒い武具の騎士たちが現れると、乙女たちが運んでいた合せて152の首を一人が一つずつ取って槍の先につけると城内に戻ってゆく。

この<黒隠者の城>が意味するところについては、物語の中で説明がされている。ある僧がゴーヴァンが解き明かすところによれば、王とはアダム、王妃とはイブ、そして金で封をされた騎士はキリスト教徒、銀で封をされた騎士はユダヤ教徒、そして鉛の封があるのはサラセン人。<黒隠者の城>は地獄、<黒騎士>は地獄の主のルシファーであると。

ペルレスヴォーの最後の大仕事は、この<黒隠者>の城を征服し、この城に囚われた多くの魂を解放することになる。例のごとく読者がどこへ行くとも知れぬペルレスヴォーの一連の冒険に従っているうちに、「彼はどンドン馬を進めると、<黒隠者の異様な森>(La Diverse Forest le Noir Hermite)に入った」となる(9942行)。この森は、かつてゴーヴァンたちが入り込んだ森であり、やはり緑もなければ、鳥の声も聞こえぬ、「醜くおぞましい(“lede et hideuse”, 9943行)」と描写されている。この森の名に使われている“divers”は「異様な」と訳したように、ここではネガティブな意味で使われている。ペルレスヴォーが執拗な射手の攻撃をもともせずつ城に近づくと、上がっていた跳ね橋はひとりでに下り、城内の敵たちは彼を恐れておとなしくしている。やがてペルレスヴォーが、<黒隠者>を見つけ出して一撃で大きな傷を負わせて馬から落とすと、城内の者たちが、広間の真ん中であつた大きな穴、その深淵、ごみ溜めに突き落とす。こうしてペルレスヴォーが城を征服すると、<車の乙女>がやってきて、かつて奪われた王と王妃と騎士たちの首を取り返す。

ここには聖書外典の『ニコデモ福音書』にみられるようなイエスの冥府降りと死者の解放が意味されていることは明らかである。具体的な描写は乏しいものの、「醜い」、「おぞましい」、「黒い」、「焼けた」そして「穴」というように、中世の数多い地獄降りのテキストにみられるモチーフが見られる¹⁰。

漁夫王の城や黒隠者の城はキリスト教的な異界として描かれているが、この作品では明らかにケルト的異界をもとにした世界も描かれている。それが、作品終盤のペルレスヴォーによる船旅であり、とくにそこで出現する四つのラッパの城のある島である。

この船旅はペルレスヴォーが奪還後の聖杯城を出てさらに異教徒制圧の冒険を続けるうち、<赤い塔> (Vermeille Tor) の城から逃げる異教徒たちを追いかけて単身彼らの船に乗り込んだことから始まる。実は読者はたまたまそのあたりへ来合わせたゴーヴァンとともに船上のペルレスヴォーの姿を認める。その時すでにゴーヴァンは「彼は今やたいへんな死の危険に身をおいている。というのもし神のご配慮がなければ船は後がどうなったか知ることもできぬような場所へたどりつくであろうから」(9408-9409行)と予告している。物語はまず先にゴーヴァンの冒険の話が続けた後、船上のペルレスヴォーへ戻る。ペルレスヴォーが舵手となる一人を残して異教徒を皆殺しにすると、「船は神の意のままにずっと昼も夜も走りつづけ」(9543行)、やがて海上の島に一つの城が見えてくる。ペルレスヴォーが舵手にどこかわかるかとたずねると、「わたしどもはずっとずっと走りつづけてきましたので、私には海も星もわかりません」と答える。船出したところからいかに遠くまで来たことをうかがわせる。森の中を馬を走らせては途中の城や庵で冒険に出会ったのと同じように、ここではあての知れぬ海を船を走らせては行く先々の島で冒険に出会う。読者はもはや船がどちらへどれくらいの距離を、どのくらいの日数を進んだのかわからない。結局、船は次のように7度止まることになる。(ただし3)と5)は同じ島)。

- 1) 四つのラッパの城の島(作品中にはこの島の名前あるいは呼称はない)
- 2) 死んだ叔父カロブリュテュの家族の住む島
- 3) カロブリュテュの息子カロブリュが鎖でつながれている岩島
- 4) ゴアールの島(カロブリュを救うための鍵を得る)
- 5) カロブリュの岩島(カロブリュを救う)
- 6) 火の燃える城(かつては叔父ペレスの城であった)
- 7) 12人の隠者の島(ペルレスヴォーの父と叔父合せて12人の墓)

船旅の最後は「船がどんどん走ると、彼は大ブリテンの島々に近づく。彼は<赤い塔>の下の森の端に到着した」というように、船出したところへ戻ってくる。ここで、2)から5)は父方の叔父カロブリュテュの家族に関わる一連の冒険であり、その後の6)は母方の伯父ペレス、そして7)は父とその兄弟たちというように、実はいずれもペルレスヴォーの親族に関わる出来事である。

異界という点で興味深いのははじめの4つのラッパの城の島である。船が島に近づくと、ひとりでに潮が引いて、船の周りは砂地となる。城内には誰も見たことがないような美しい部屋と館の数々。大きな木の下に、清らかな水をたたえた泉、泉を取り囲む金の柱、そして宝石からなる

砂利。応対に出てきた白衣の2人は髪と髭は雪のように白く、しかし顔つきは若く見える。そしてガラスの樽の中の謎の騎士(生きてるように見えるが、話しかけても答えない)。イエスと使徒たちの描かれた王の間での食事。空中から降りてくる金の鎖と冠、床に空いた穴から聞こえるうめき声。そして2人はペルレスヴォーに言う、後に赤い十字のしるしのある船を目にした時には、その船でここに戻ってくるようにと。そして、戻ってきた時には、ペルレスヴォーがその王冠を頭に戴いて、その島の近くにある<充溢の島>(Ile Plenteuse)の王となる、もし王として失格となれば先に聞いたうめき声の出所である<欠乏の島>へ送られることになるのだと。

ここにはいかにも異界、楽園を思わせるモチーフがふんだんに出てくる。リースやルーミスはこの島の描写のもとになっているのがケルト伝説のCaer Sidiではないかと推定している。しかし、ガラスの樽の中の騎士が何者で、また<充溢の島>とは何なのか、作者はついに謎めいたところを明かさないうまに物語を終わらせている¹¹。

このような船旅と、そして船旅で訪れた島へ戻っていくというところは、ケルト伝承の「イムラマ」、とりわけフランス語版も遺されている『聖ブランダンの航海』(12世紀初め、韻文約1800行)を思わせる¹²。

修道院長ブランダンの場合はまず話聞く天国(paradis)を訪れてみたいと十数名の修道士たちとともに船出し、7年の船旅を経てついに天国にたどり着き、その豊かな土地を目にした後に帰還したのであった。天国の案内人はブランダンに、「いま肉の身でできましたが、間もなく霊となって戻ってくるのです。」と言い(1795-96行)、はたして物語の最後にブランダンは「死ぬときが来ると、神が定めた地に戻っていった」となる(1831-32行)。

しかしペルレスヴォーの場合は生きのまま、異界の島へ戻ってゆくのであり、さらにその地で王となるはずである。たしかに約束の船が来るのは、聖杯城に来ていた母や妹、そのほかの僧たちがみな死んだ後であり、その船に、アリマテアのヨセフとニコデモという、父方母方両方の聖なる家系の2人の祖の遺骸、そして漁夫王と自分の母の遺骸を船に運びこんで出発する。まさにこの世から決定的に離れてしまうのであれば、異界の島へ行くことは、この世からすれば死ともいえる。

『聖杯の探索』でも最後には主人公ガラアドの一行による船旅の話が出てくる。神に選ばれた3人の騎士、ガラアドとボオールとペルスヴァルは、コルブニックの城でついに聖杯の典礼に与ると、神の命に従って近くの海辺から小舟に乗り込む。「こうして一同は、神が何処へ導きたまうのかわからぬままに、長いあいだ、海の上をさまよった。」¹³やがて舟はサラスの城市に着くが、3人はその地で邪悪な異教徒の王エスコランに一年間投獄され、一年後に王が死ぬとガラアドが王位につき、さらに一年後にガラアドは死ぬ(魂は天使によって運び去られる)。ペルスヴァルはそこにとどまってさらに一年ばかり後に死に、ボオールがアルテュール王のもとへ戻ったところで物語が終わる。

『聖杯の探索』の船旅はペルレスヴォーの船旅よりもずっと単純で、またサラスという城市も

4つのラッパの城の島に比べればあまり異界の島らしき描写もない。またサラスを訪れるのがガラアド以下3人であるのに、ペルレスヴォーはあくまで一人で最後まで冒険を続ける。そしてとりわけ、ガラアドについては王となった後に死んでその魂が昇天したところまで語られているが、ペルレスヴォーについては王となるべき島へ向けて船出するというところで物語は終わっている。

以上、この作品に見られる異界として、聖オーギュスタン聖堂、漁夫王の城、黒隠者の城、そして4つのラッパの城の島をとりあげてきたが、もちろん、規模の大小をまじえて、この作品では他にも数々の異界が描かれている、あるいは異界のモチーフがでてくる。

聖オーギュスタン聖堂のような異空間ということでは、たとえば妹のダンドランヌが聖骸布を得るために単身入らなければならなかった〈危険の墓地〉がある。その周囲には悔悟の秘蹟をさずかることなく死んでさまよう騎士の霊がひしめくが、聖アンドリューの祝福のおかげでその中は安全に守られているという聖なる空間である。また、漁夫王の領地の入り口の城の前には銅でできた2人の野人がいたが、異教徒たちの〈銅の塔の城〉の前には、魔術 (l'art de nigromance) によって作られた2人の男が鉄のハンマーを持って立っている。あるいは、不思議な城ということでは、回転を続けている限り入りこむことのできぬ城、〈大いなる防御の城〉(Château de Grand Defois) というものがある (ペルレスヴォーが城門を剣で叩くと回転が止まり入城できたが、ゴヴァンとランスロは入ることができない)。また、奇妙な慣習があるという点では、かの“Return Blow”のエピソードがこれまた有名な“Waste Land”の名とともにでてくる〈荒れ市〉(Gaste Cité) や、〈髭の城〉(Château des Barbes) や〈女の城〉(Château des Pucelles)¹⁴、また〈火の燃える町〉などがある。

このように作者は騎士たちの冒険の旅の途上にさまざまな異界の場、土地を設けているのであるが、逆に言えば、異界の場所を訪れる旅こそ騎士の冒険の旅であり、その点ではじめに見た4つの場所が大きな意味を持つ。アルテュールによる聖オーギュスタン聖堂への旅によって、物語が再開し、そこで漁夫王の城へ冒険、聖杯城の奪還、そして聖杯城参りというように冒険は続く。しかしそうしたさまざまな異界の場所、土地、世界も、実は古きアルテュールの時代のブリタニアという世界のことである、この物語は歴史上にあった真実を伝えたものであるというのが、この物語のテキスト自体の中でたびたび主張されているところである。アルテュールについては始めに、「われらが主のご受難以来というもの、地上の王の中で、ブリタニアのアルテュールほどイエス・キリストの教えの弘布に貢献した王はなかった」(58-60行)と言われており、また物語の途中でも、「物語が我々に証言するところによれば、当時、アルテュール王の領地には聖盃(calice) というものがまったくなかった」(7221-7222行) というようにこの歴史書のような記述が出てくる。では、その歴史上の現実の世界とこうしたさまざまな異界の場とはどのような関係にあるのか。

もちろん、我々と違って、中世人の読者自身にとって異界、異空間はずっと身近な世界、場所

であったはずである。しかしこのアルテュールのブリタニアの世界において、漁夫王の城や4つのラッパの城の島などはどのような意味を持つのであろうか。

ニッツェは、上に引用した文中の“Artuz de Breteigne”に注をつけて、『ペルレスヴォー』の地理に関するレフェランスは多くのロマンスのそれに比べて数が多く、しかも一貫性があるものの、それらはアーサーとその家臣、あるいはその支配下にある人間たちの支配下の土地をはっきりと示すものではない」と述べている。

まず、このニッツェの言葉の前段に注意したい。比較的とは言え、『ペルレスヴォー』では地名への言及がしばしば出てくる。この「ブリタニア」や「ログル（ログレス）王国」や、あるいはアルテュール王が宮廷を開く「カルドエイユ」、「ペヌヴォワスズ」など。こうした地名についての研究は、すでに19世紀からこの作品も含めて、いわゆるアーサー王伝説、アーサー王ロマンスに出てくる地名が現実のどこのことなのか議論されてきた。たとえば「カルドエイユ」は「カーライル」(Carlisle)のことであり¹⁵。そこで現代のわれわれは物語の地名を現在のイギリスの地図の上にマークしてみようとする。しかし、中世の作者や読者が物語を読みながらその背景にどのような地図を思い描いていたか、そもそもそういうことをしていたのかどうかさえ不明である¹⁶。また、現実の世界での位置はともかくとして、騎士が立ち止まったさまざまな場所（そこには「カルドエイユ」もあれば「赤い平地」もある、名もなき城もある）、登場人物や語り手が言及する地名、そうしたものを一枚の地図の上に描いてみたくなるのがおそらく現代のわれわれであろうが¹⁷、はたして中世の読者にそのような気持ちが起こりえたかどうかはなほ疑問である。ズムトールはそもそも西洋中世人には、「場所」にあたる語はあっても、近代の「空間」(espace)にあたる語も観念もなかったことを指摘している¹⁸。であれば、いくつもの場所を互いの相互関係においてイメージする、全体のパースペクティブの中でイメージするということはなかったのではないかと思われる。たとえば『ペルレスヴォー』の作者の場合も、イングランドとウェールズ、スコットランドのおおよその位置関係は頭にあったかも知れないが、冒険の物語の舞台となる多くの場所をその全体の中にあてはめようとは考えもしなかったのではないか。作者にとってさまざまな場所というのは、たとえて言えば、単なる地名が書きこまれたカードであって、ある場所を訪れるということは、必要に応じてそこから1枚抜いてくるというようなものではなかつたらうか。

さまざまな地名や場所の相互間の細かい空間的な関係というものはなくとも、地名や場所の間には観念的な関係というものもある。物語の主題との関わり方など。そうして見ると、作者は一方にアルテュール王のブリタニア、そして他方にペルレスヴォーおよび聖杯に関わる場所からなる広がりという、2つの広がりを区別していたように思われる。

まず、その前者の方について見れば、ニッツェは、先の引用に続いて、作者がアルテュール王の王国についておおよそ次のような区別をしていると指摘している¹⁹。

- 1) 「大ブリタニア」 (“La Grant Breteigne”)
 - アルテュール王の広い意味での王国全体
 - 現在のウェールズ、コーンウォール、イングランド (ログレス) が入るが、
 - アルバニ (スコットランドにあたる) は除く
- 2) 「ウェールズ」 (“Gales”) アルテュール王の本来の領地とは区別される
- 3) 「ログル (ログレス)」 (“Logres”) イングランド アルテュール王の本来の領地

『ペルレスヴォー』の物語の中でアルテュールの宮廷の所在地として出てくる地名はカルドエイユとベヌヴォワスーズ、そしてカマアロ (Kamaalot) である。このうちカルドエイユとベヌヴォワスーズは実際に物語の舞台となるが、宮廷所在地としてのカマアロはこの名前についての言及があるだけである。

先にカマアロという名について言えば、実は物語のはじめの方でペルレスヴォーの故郷の地として出てくる (457 行)。また物語の中ではゴーヴァンがそこを訪れている (1017 行)。そして作者は物語の半ば以上過ぎたところ、すでに何度も出てきているこのペルレスヴォーの故郷カマアロについて、あらためてこのカマアロが、もう一つのカマアロとは違う、そちらはログル王国の入り口にあると読者に注意を促している (7280-7287)。宮廷所在地カマアロへの言及がここだけであることを思えば、このカマアロはペルレスヴォーの生地カマアロをきわだたせるためだけのものと思われる。

つぎにベヌヴォワスーズという地名は少なくともフランス語の他の韻文・散文アーサーロマンスには出てこない。この作品では聖オーギュスタン聖堂から帰り、気力を取り戻したアルテュール王が宮廷を開いた場所としてでてくる。この名が出たときに「ウェールズの海に面したところにある」 (“qi siet seur la mer de Gales”, 572 行) とあり、また後には「ウェールズにあるベヌヴォワスーズ」 (4002 行) という言い方も出てくるように、ウェールズの中にあることに読者の注意を引いている。

最後のカルドエイユはログル王国との関わりが曖昧である。『ペルレスヴォー』の物語は無気力症に陥ったアルテュール王がカルドエイユにいることから始まる。クレチヤンの『聖杯の物語』では、ペルスヴァルがたずねていくアルテュール王は「カルドエイユに滞在しておられる」²⁰ ことになっていたから、この点では、『ペルレスヴォー』の作者はクレチヤンの設定に忠実に物語を引き継いだと言える。一般にアーサー王伝説のカルドエイユは、イングランド北部のカーライル (Carlisle) のことであるとする説が有力ではある。たとえばマリ・ド・フランスの『ランヴァル』の冒頭は、「勇猛かつ優雅な王アルテュールは、国を荒らすスコット人とピクト人のために、カルドエイユに滞在していた」となっており²¹、リシュネルの C F M A 版の固有名詞一覧ではこの “Kardoel” を “Carlisle” としている²²。ところが、クレチヤンは『獅子の騎士』ではっきりと「ウェールズにあるカルドエイユ」 (“Carduel en Gales”, v.7)²³ としているからこの町をウェー

ルズにある町と思っていたと考えられている。他のアーサー王ロマンスでもカルドエイユをウェールズにしているものもあってカルドエイユとウェールズの関係はまちまちである²⁴。

ニツェは『ペルレスヴォー』には「ウェールズのカルドエイユ」などという表現がないことを指摘することによって、『ペルレスヴォー』でのカルドエイユがウェールズとは区別されるログル王国の中の町であるとのめかしている。テキストから読み取るとは厳密には不可能ながら、この物語でのカルドエイユとペヌヴォワスーズとの役割を考えるならばニツェの推測は正しいものと思われる。

物語で、はじめにカルドエイユにいたアルテュール王が向かった先の聖オーギュスタン聖堂がウェールズにあることは、その聖堂の僧について「ウェールズ王国でもっとも徳の高い隠者」(“li plus preudom ermites qui soit o roiaume de Gales”, 1.97) とグニエーヴルが言っていることでわかる。聖堂参りの後、病が癒えたアルテュール王は、わざわざカルドエイユからペヌヴォワスーズに場所を移して宮廷を開く。その宮廷を「車の乙女」の一行が訪れることから、聖杯探索に関わる物語が、再開する。やがてゴーヴァンとランスロそれぞれの冒険の話となり、ペルレスヴォー自身が素性を知られぬままにペルレスヴォーがヨゼフの盾をとりききて、次にはここからゴーヴァンとランスロによるペルレスヴォー捜索の冒険が始まる。3人が一同に会した後、ゴーヴァンとランスロは宮廷に戻り、ペルレスヴォーは故郷の地カマアロに戻って平和を回復する。そして次にカマアロを発ったペルレスヴォーがアルテュール王の宮廷を訪れるとき、宮廷はまたカルドエイユに戻っており、このカルドエイユを経由してペルレスヴォーは聖杯城を奪還し、やがてアルテュール王はカルドエイユから聖杯城参りをして、カルドエイユへ戻る。その後、アルテュール王はずっとカルドエイユの宮廷にあって、そこでは、外敵の王国への侵攻と奸臣ブリアンによる宮廷内の混乱が語られる。アルバニ(スコットランド)へのオリアンド王の侵攻、ランスロの派遣。裏切りが露見したクウーのブルターニュへの逃亡、ランスロの投獄など(ここでカルドエイユにあってアルバニ防衛に兵を送るアルテュールの姿は、スコット人・ピクト人対策のためにカルドエイユに滞在していたという『ランヴァル』のアルテュールの姿と重なる)。ペルレスヴォーの方は異教徒制圧の冒険をを続けながらもはやアルテュールの宮廷を訪れることはない。

カルドエイユは王国統治の中心であり、その象徴である。だからこそ、ペルレスヴォーによる聖杯城奪還の後、カルドエイユに2つの太陽が出現し、聖なる声がアルテュールに聖杯城参りを促したのである。アルテュールはカルドエイユといういわば俗世の中心ともいえるところから、聖なる世界の中心へ旅する、そこで漁夫王の後継者とも言えるペルレスヴォーが出迎えるのである。

逆に、カルドエイユがそうした王国統治の象徴であるからこそ、作者は、聖杯の冒険の再開、聖杯の冒険の主人公の復活の契機となるべき場所として、新たにウェールズに、しかも「ウェールズの海に面した」ところにペヌヴォワスーズを設けたと思われる。先に物語の最後のところ

で聖杯城に船がやってくることを指摘したが、実はよく見ると、ペルレスヴォーの冒険にはしばしば海が関わっていることに気づく。もちろん、最後の船旅がそうである。しかしそれ以前にも彼は船に乗って日々を過ごしていたことがある。

元気を回復してペレスの庵を出ることによってこの物語に登場したペルレスヴォーは、ペレスの庵を出ては戻ることを二度繰り返した後、やがてウェールズ王国に入り（3889行）、〈乙女の女王〉（Reine de Pucelles）の城へやってくる。そこで城の下にある島へ渡って、女王を脅かす〈死の城の王〉と対決する。王は逃げて、その平和が回復する。物語はここで話をペンヌヴォワスーズの宮廷に移し、やがてペルレスヴォーをさがすゴーヴァンの冒険の途上、ある隠者が〈乙女の女王〉の城に来た騎士の話として、その騎士がその後もあらゆる島を訪ねては武勇を誇る騎士をことごとく打ち倒すようになって1年、あたりに騎士と言えるものはいなくなったと言う。直接、詳しく語られることこそないものの、主人公ペルレスヴォーと海のつながりがすでにここで見られる。

ここに出てきた〈死の城の王〉は、ペルレスヴォーの母方の叔父の一人であり、後に漁夫王の城を攻めて征服することになる。その〈死の城の王〉が〈乙女の女王〉を威嚇していたのは、漁夫王の味方をしていただけということになっている。すると、ここではただペルレスヴォーが海で戦うというだけでなく、ペルレスヴォーの血筋の者がやはり、海とのつながりを持っていることがわかる。

ペルレスヴォーの出生地カマアロも、はじめのうちはわからないが、後になって海のそばであるとの説明が出てくる。ゴーヴァンが最初にカマアロを訪れるところでは、「この世でもっとも美しい野を見出した、そして2アルシェばかり進んだところで、とある山のもとの森の近くに城が見えた」（1005-1009行）というように描かれているのだが、後に語り手がアルテュールの宮廷の所在地のカマアロと区別するとき、「〈寡婦の奥方〉の領地たるカマアロはウェールズのもっとも未開の島の端、海のそばに、西側を向いて位置していた」と言っている（7281-7283行）。

カマアロは先に見たように作者があえて読者にとってはアルテュール王の宮廷所在地としてなじみのある名をつけたものである。クレチヤンのペルスヴァルの出身地は物語りのはじめに「人里はなれた荒れ森」²⁵とだけあるだけで、地名などは出てこない。それを、作者があえてカマアロと名づけたのは、おそらくまず一つには作者の名前についてのこだわりによるものと思われる（同じ一つのものが二つ以上の名前を持つ、逆に同じ名前が二つ以上のものにつく²⁶）。しかし、またあえてカマアロの名を使うことは、アルテュールの宮廷に対して、ペルレスヴォーの故郷をいわば対等なものとして示そうとしたのではないかと思われる。そしてそのカマアロは海のそばにある。

主人公ペルレスヴォーは父方にニコデモ、母方にアリマテアのヨセフという、ともにキリストの受難に立ち会った人間を祖とする聖なる家系の末裔であることは、物語のはじめのプロローグ

にあたるところで述べられている。父方、母方の祖といっても、父のアランがニコデモの孫、母のイグレはヨセフの姪ということから、ペルレスヴォーはキリストの受難の時代からせいぜい2世代から3世代あとの人間ということになる。

母親には3人の兄弟があり、それが漁夫王と隠者ペレス、そして死の城の王ということである。すでに見たように、漁夫王の城はおそらくウェールズのどこか海のそばにあり、またペレスはペルレスヴォーの船旅の途中で明らかになるようになって海中のある島の城主であった(息子ジョズウの母親殺しのために城を捨て隠者となっただけ)。また3人兄弟の中の悪人<死の城の王>は、その名の<死の城>(Château Mortel)なるものがどこかにあったのかどうかさえわからないが、先に見たように海とのつながりが推察される。

ペルレスヴォーの父親にはほかに11人の兄弟があったと、プロローグにその11人の名が挙げられている。ペルレスヴォーが物語に登場する時点で、父親もふくめて、全員がすでに死んでおり、実際ペルレスヴォーは船旅で訪れた最後の島で、12人の墓を目にすることになる。しかし、11人のうちのあるものは間接的ながら物語の展開に関係してくる。ブラン・ブランダリ(Brun Brandalis)とエリナン・デスクヴァロン(Elinanz d'Escavalons)については、物語の途中で、それぞれの息子たちがある者に殺されたと言って、復讐を求めてその首や遺骸を運んで旅する乙女が登場する。そしてペルレスヴォーがそれぞれの殺害者を倒して復讐を果たす。同様に、カロブリュテ(Calobrutus)の息子のカロブリュ(Calobrus)については生きてはいるが囚われの身となっているところを、ペルレスヴォーが船旅の途中で助けることになる。また、叔父たちの名前に組み込まれている地名のうちあるものは、その後の物語の舞台となってくる。まずブランダリュ・ド・ガル(Brandalus de Gales)、メリアルマン・ダルバニ(Meliarmans d'Albanie)、アリバン・ド・ラ・ガスト・シテ(Alibans de la Gaste Cité)については、それぞれウェールズ、アルバニ、<荒れ町>という地方ないし地域名が入っている。そしてフォルティム・ド・ラ・ヴェルメユ・ランド(Fortimes de la Vermeille Lande)の「ヴェルメユ・ランド」はペルレスヴォーを探すゴーヴァンが登場した騎馬試合が行われるところ(4395行以下)、同様にメラリ・デュ・プレ・デュ・パレ(Meralis du Pré du Palés)の「プレ・デュ・パレ」は聖杯城へ向かうアルテュール一行が騎馬試合に参加するところである(7119行以下)。

このようにペルレスヴォーの父方の叔父たちの名はプロローグではただ列挙されているように見えながら、じつはその名が後の物語の世界のあちこちに現れるようになっている。ペルレスヴォーの父をはじめとした12人の兄弟はウェールズを中心にブリタニアの各地に広がり、そして死後はいずれも海中の島に葬られたことがわかる。

物語が終わるとき、父方、母方ふくめて、ペルレスヴォーの血筋はあたかもペルレスヴォーを最後に絶えることを予想させる。物語が始まるときには、生地カマアロに母イグレと妹グンドランヌがおり、また母方に漁夫王、ペレス、死の城の王の3人の叔父、そしてペレスの息子ジョズユがいた。やがて3人の叔父たちは死んでいく。終わりのほうの船旅の途中で、ペルレスヴォーは

父方の叔父カロブリュテュの妻と息子と2人の娘に出会う。しかし、それからペルレスヴォーが聖杯城に戻り、そこで母と妹に再会した後、いったいどれくらいの時間が経ってからであろうか、約束の船が迎えに来たとき、その母も妹も、聖杯城にいた他の僧たちとともにすでに死んでいる。生き残っているのは従兄弟の隠者ジョズゥだけで、ペルレスヴォーは迎えの船に、父方母方それぞれの祖、アリマタヤのヨセフとニコデモ、そして漁夫王と母イグレの遺骸を運び込んで出発する。ヨセフとニコデモの遺骸は、そもそも、一方はカマアロの礼拝堂、他方は漁夫王の城の前の礼拝堂の前に、誰のものとも知れぬ謎の棺として置かれていたのが、ペルレスヴォーが訪れたときに自然に開いて誰のものかわかったというものである。またペルレスヴォーの母イグレと妹ダンドラヌはすでにカマアロから聖杯城に移ってきていたのであるが、あらかじめペルレスヴォーは聖杯城に来たアルテュール王に、残されたカマアロの城を王の城とするように依頼している(7276-7278行)。

一人残ったジョズゥは聖杯城に閉じこもり、「ペルレスヴォーが出発して長い間ここにとどまり、中で命を終えた」(10166-10167行)とある。その時、叔父カロブリュテュの子どもたちがどうなっていたかはわからない。ただし彼らはペルレスヴォーが船旅をした海の島のひとつにいたのであって、はじめからブリタニアとは別の世界にいたとも言える。

以上のことから、つぎのような図式が読み取れる。ペルレスヴォーの血筋、それはエルサレムでキリストの受難に立ち会ったヨセフとニコデモにさかのぼるが、その一族は、エルサレムからおそらくまずブリテン島の西の海へと渡り、次いでウェールズを中心に、ある者はブリタニア各地に広がって、キリスト教布教のために戦い、ついにペルレスヴォーによる勝利の後、最後にペルレスヴォーが西の海の島へ戻ることによってブリタニアでの役割を終えたのである。これは聖杯がエルサレムから海路ブリタニアへ移されてきたというロベール・ド・ボロン以来の、聖杯とアルテュール王のブリタニアとの結びつきを尊重しながら、そこに西方の異界の海というモチーフを組み合わせたものと言える。

とするならば、ペルレスヴォーはこの世界から最後に異界へ行くと言うよりも、もともとの異界の一族の騎士が異界に戻ってゆくと考えるべきではないだろうか。『聖杯の探索』のガラハドは、「地上の騎士道」を超える「天の騎士道」の具現者であり、武具を取って戦うことなく、そして聖杯の神秘を目にして最後に昇天する。これに対してペルレスヴォーは、敵の手下どもを血祭りに上げさらにその血を溜めた桶の中で仇敵を溺死させるほど残酷であり、まさに戦って聖杯を奪い返し、なおもキリスト教を弘めるべく改宗を拒む異教徒たちを殺してゆく。彼はゴーヴァンやランスロのような円卓の騎士とも、また天上の騎士ガラアドとも異なる、まさしく異界の騎士と言えるのではないだろうか。

『ペルレスヴォー』の作者はジョフロワ・ド・モンムト以来の過去のブリタニアの英雄アルテュールの歴史世界を舞台としながらも、そこにキリスト教的あるいはケルト的な異界のさまざまなモチーフ、テーマをもとに、さまざまな規模の異界の場、世界を冒険の場として設けることによ

てユニークな物語の世界を作りだしたと言える。そうした異界の場や世界は歴史的地理的世界のここかしこにあるいは彼方に空いた穴のごときものである。異界にあっては時間もこちらの世界とは違う進みかたをするというのも典型的なモチーフであるが、『ペルレスヴォー』の物語にあって、4つのラッパの城の島の世界はいわば時間の止まった世界である。そこの住人たちが髪と髭は雪のように白く、しかし顔つきは若く見え、そしてかつて生きたアリマタヤのヨセフを目にしたことがあると言う。ならば、このアルテュール王の時代にあって、主人公ペルレスヴォーがキリストの受難に立ち会ったそのヨセフの姪イグレの息子であるという不可解さも不思議なことではなくなる。現実の世界の中に空いた穴のような異界の世界、その穴が閉じた後もなお現実の世界は残る。ちょうど夢から覚めた後、また現実の生活が続くように。あれほど工夫を凝らした続編という形でこの物語を始めた作者であってみれば、いかにもまだ続きが語られるべきところで物語を終えるのは意図的なものであったと思われる。

-
- 1 Nitze, William A. and Jenkins, T. Atkinson, *Le Haut Livre du Graal, Perlesvaus*, 2 vols., Phaeton Press, New York, 1972 (Reprint of 1932 edition).
 - 2 *La Queste del Saint Graal*: 天沢退二郎訳、『聖杯の探索』、人文書院、1994年。
 - 3 Payen, “L’art du recit dans le Merlin de Robert de Boron, le Didot Perceval et le Perlesvaus”, *Roamnce Philology*, Vol.XVII, No.3, 1964, p.570-585.
 - 4 Kelly, Thomas E., *Le Haut Livre du Graal: Perlesvaus, A Structural Study*, Genève, Droz, 1974.
 - 5 Patch, Howard Rollin, *The Other World, According to Descriptions in Medieval Literature*, Cambridge (Mass), Harvard University Press, 1950. (パッチ、ハワード・ロリン、『異界 中世ヨーロッパの夢と幻想』、黒瀬保他訳、三省堂、1983.)
 - 6 クロンスキーによれば、フランス語の “l’autre monde” は、英語の “the other world” がアーサー王文学研究者の間で普及した後、それに対応する語として改めて使われるようになった、しかしドイツ語でそれらに対応するはずの “Anderswelt” という語はあまり使われていないということである。Klonski, Tom, “Réflexions sur la notion d’Autre Monde : De la critique au texte”, in Hüe, Denis et Ferlampin-Acher, Christine (éd.), *Le Monde et l’Autre Monde, Actes du colloque arthurien de Rennes (8-9 mars 2001)*, Paradigme, Orléans, 2002, p.211-222.
 - 7 古フランス語の “isle” (“ille” の綴りもある) にここでは「島」の訳語をあてているが、本作品中について言えば、この語はつねに「海中の島」を意味して思えず、陸上のある種の地形ないし町のようなところをさしていると思われる場合もあり、曖昧である。分類すると、①登場人物が船で上陸している島、②かの有名な “Isle d’Avalon” のような地名 (明らかに海中にあるとは思えない)、③さまざまなどころという時にしばしば “forest” や “terre” と並べて使われる、あるいはアルバニ攻防で「ランスロがすべて奪い返した」といわれる “illes” など。なお現在のイギリスの地名にも島ではないのに、island や isle と言われるところがある (ロンドン市中の Isle of Dogs は三方を川に囲まれ、Isle of Purbeck はかつて満潮時には島となっていた半島、Isle of Ely はイングランド東部の有名な沼沢地帯の中の町など)。またラテン語の “insula” には、「孤立した家、あるいは島のように家が集まっているところ」 (Gaffiot) の意味がある。
 - 8 主人公ペルレスヴォーのアイデンティティに関する問題については、拙稿《 L’entrée en scène du héros dans le *Perlesvaus* 》(*Étude de langue et littérature françaises*, No. 52, 1988, pp.1-12) で論じた。

- 9 黒隠者の城を異界として論じたものに次のものがある。Berthelot, Anne, “The Other-World Incarnate: “Chastel Mortel” and “Chastel des Armes” in the Perlesvaus” (Translated by Amy Reed), *Yale French Studies*, Special Edition, 1991, p. 210-222.
- 10 『ニコデモ福音書』も含めた中世の数々の地獄への旅、幻視を語るラテン語テキストについてミーシャがフランス語訳をまとめている。Micha, Alexandre, *Voyages dans l'au-delà, d'après des textes médiévaux IVe-XIIIe siècles*, Klincksieck, 1992.
- 11 「ガラスの樽の中の騎士」について、ケリーはアレキサンダーではないかという説を出していたが（ガラスの樽で海中を探検したとされる）、最近、スタネスコがこの問題を取り上げて、諸説を紹介した上で、「実のところ、この人物が何者であるかは重要でない」、「死者の国の象徴である」と述べている。Kelly, *op. cit.*, p.115-116. Stanesco, Michel, “Une merveille bien énigmatique : le chevalier dans un tonneau de verre”, in Hüe, Denis et Ferlampin-Acher, Christine (éd.), *Le Monde et l'Autre Monde*, 2002, p.359-368.
- 12 松村剛「冥界往来－『聖ブランダンの航海』」、東京大学教養学部『外国語科研究紀要』、第39巻、第2号、1991年、p.1-84.
- 13 天沢訳、『聖杯の探索』p.409.
- 14 ジョフロワ・ド・モンムート以来、さまざまな作品に出てくるこの「乙女の城」のモチーフについては次を参照されたい。Baumgartner, Emmanuèle, “Le Château des Pucelles : variations sur un motif arthurien”, Hüe, Denis et Ferlampin-Acher, Christine (éd.), *Le Monde et l'Autre Monde*, 2002, p.37-49.
- 15 フランス語のアルテュール王物語の固有名（地名、人名）については、以下のものにまとめられている。West, G.D., *French Arthurian Verse Romances 1150-1300, An Index of Proper Names*, University of Toronto Press, Toronto, 1969. West, G.D., *French Arthurian Prose Romances, An Index of Proper Names*, University of Toronto Press, Toronto, 1978.
- 16 たとえば13世紀にかなり正確にブリテン島を描いた地図としてマーシュ・パリスのものがあるが、ここではスコットランドがほぼ一つの島のように描かれている。世界図の一つとして有名なヘレフォード図（1300年頃）では、イギリス諸島は全体の左下端に押しこめられゆがんでいるように見えるが、やはりスコットランドは一つの島として描かれている。またどちらの場合もそれぞれの川が強調されているので、ウェールズは南北2本の川によってイングランドから切り離されているように見える。（織田武雄、『古地図の世界』、講談社、1981、p.137-141）
- 17 実際、『ペルレスヴォー』のエヴァンズによる英訳のEveryman's Library版の1929年版の巻末には現代のイギリスの地図の上に、物語の場面として出てくるさまざまな場所を詳しく書き入れた図がついていた（おそらく挿絵画家のKatharine Maltwoodによると思われる）。
- 18 Zumthor, Paul, *La Mesure du monde*, Seuil, Paris, 1993, p.51-52.
- 19 Edition Nitze, t.II, p.202.
- 20 天沢訳、「ペルスヴァル」、149頁。
- 21 *Lanval*, v.5-8 (Ed. Rychner, *Les Lais de Marie de France*, 1959). 月村辰雄訳では「熱高く雅やかなアーサー王は、カーライルの地にとどまり、王国をそこなうスコット人、そしてピクト人と対峙していた」（『十二の恋の物語』、岩波文庫、1988年、p.104）
- 22 Ed. Rychner, 1977, p.290.
- 23 Ed.Roques, 1978, v.7.
- 24 前掲 West 編の固有名詞一覧集、2冊を参照のこと。
- 25 天沢退二郎訳、「ペルスヴァルまたは聖杯の物語」、『フランス中世文学集2』、白水社、1991、p.144。原語は“la gaste forest soutaine” (Ed.Roach, 1959, v.75.)
- 26 主人公ペルレスヴォーは、病の床にあるときはバル・ルイ・フェとよばれた（クレチヤンではペルスヴァルだった）。また、はじめの聖オーギュスタン聖堂参りのエピソードで、乙女はアルテュール王に名前を教えられたものの、「あなたはこの世でもっとも悪しき王の名前を持っている」（518-519行）というように、アルテュール王とは名前の同じ別人だと誤解する。

Abstract

Perlesvaus, chevalier de l'autre monde

Hiroshi UEDA

A la fin du *Perlesvaus*, le héros part pour l'île mystérieuse définitivement alors que le roi Arthur reste toujours menacé de ses ennemis. L'auteur, qui a repris astucieusement le récit laissé inachevé par Chrétien de Troyes, a-t-il ici de la peine à conclure?

Le monde de ce roman de chevalerie est plein de lieux ou d'espaces "aventureux" où se retrouvent des motifs traditionnels de l'autre monde, chrétiens et non-chrétiens: entre autres, la Chapelle Saint-Augustin, le château du Roi Pêcheur, le château du Noir Ermite et l'île du château aux quatre trompettes.

D'ailleurs, l'histoire prétendue vraie de ce livre comprend plusieurs références géographiques, à travers lesquelles on perçoit l'interférence de deux puissances terrestre et extra-terrestre: Arthur à Carduel et Perlesvaus en Gales près de la mer. Les élus de la sainte "lignage", partis de la terre sainte, n'ont-ils pas débarqué en Gales pour propager le christianisme?

Perlesvaus, "divers" et belliqueux, est chevalier de l'autre monde. Quand il retourne dans l'autre monde, celui-ci se ferme à jamais. Mais l'histoire continuera toujours. Voilà la conclusion voulue de notre auteur.